

立ち読み版

連載 インタビュー

Umano! #12



「りんけんバンド」リーダー  
株式会社アジマ 代表取締役

てるや りんけん

照屋 林賢さん

1949年沖縄県生まれ。祖父・父ともに沖縄で有名な音楽家であり、実家は三線・レコード店という、音楽と商売に囲まれた環境に育つ。高校卒業後に音楽理論を勉強するために上京し、バンドマンとしての音楽生活を開始。沖縄に戻り、1977年にりんけんバンドを結成。1990年、CD「ありがとう」で全国デビューし、日本レコード大賞「特別賞」受賞。沖縄固有のリズムと音楽にこだわりながらも、さまざまなエッセンスを取り入れ、「りんけんサウンド」の創造を続けている。事業家としても、1994年に株式会社アジマ（沖縄方言で「交わる」ところの意）を設立し、音楽レーベルをはじめ、スタジオ、ライブハウス、レストラン、ホテルを運営するほか、アーティストのプロデュースや映画監督など多方面で活躍。IT・マルチメディア交流のための組織「North Valley Okinawa」の運営や音楽教育にも注力している。

【写真】 ミヤイチ「ポルコ」マサヒコ

## エンターテインメント経営を目指す 沖縄のミュージシャン&事業家

【取材・文】 原 正紀

株式会社クオリティ・オブ・ライフ代表取締役・高知大学客員教授・成城大学非常勤講師。中小企業診断士。早稲田大学法学部卒業後、大手メーカー、株式会社リクルートを経て、独立。産学公個に対し、採用・育成・人事制度構築など、人材関係の幅広い提案を行う。著書に「採用水戸期」（日本経済新聞出版社）、「優れた企業は日本流」（扶桑社）、「インタビューの教科書」（同友館）など多数。

HARA'S BEFORE

沖縄——私自身も同地に会社を設立していることもあって、地域にオンリーワンの魅力を感じている。人口も観光客も増加を続け、経済は発展している反面、沖縄らしさが失われていると感じることもある。

ミュージシャンの照屋林賢さんは、音楽はもちろんのこと、事業家としても、発展し続ける観光地・北谷をベースに、エンターテインメントを中核とした施設運営や活動を行っている。これだけ地域や文化を強く感じさせる事業家はなかなかいない。音楽と経営の融合から何が生まれるのだろうか。

### 沖縄音楽からビジネスに出会うまで

原：今日は音楽の話、ビジネスの話、沖縄の話、いろいろお聞かせください。多彩な活動しておられますね。

照屋：「りんけんバンド」をつくったのが、私の本格的な活動のスタートです。初めのうちはなかなか売れなかったのですが、オリオンビールのCMでオリジナル曲の「ありがとう」が採用され、ようやく売れるようになっていきました。祖父の照屋林山も、父の照屋林助も、沖縄では知られたミュージシャンだったので、自分もその道に進んだほうが手取り早いのではと思っていました（笑）。

音楽の道は、常に難しさの連続です。沖縄は商圏が狭いので、本土に出ることがミュージシャンにとっての成功の秘訣だと思っていました。なかなか売れなくて挫折しかけたこともあります。そうやって、もがいているうちに、僕らはやはり沖縄音楽で、半径5メートル以内にいる人たち、つまり、近寄ってきてくれた人たちに喜んでもらえばいいじゃないかと開き直すようになりました。

原：音楽活動をスタートしたのは何歳くらいの頃ですか。

照屋：デビューは高校生の時でした。実家の照屋楽器店で、レーベルを作ったり、レコーディングの手伝いをしたり、アレンジャーとして過ご

たりしながら、音楽の道に進んでいきました。当時はバンドマンが大勢いたので、多くの曲をアレンジしていましたが、自分が知らないことはたくさんある、これではダメだから勉強しようと東京に出ていったんです。父には大反対されましたが（笑）。父が出演するテレビ番組の手伝いや、ギターの伴奏をしていましたが、才能や知識が沖縄の中で終わってしまう気がして嫌でした。それも東京に出た理由の一つです。

結局、音楽学校はフェードアウトするように辞めてしまったのですが、東京ではいろいろないい経験をしました。作曲家への夢を持ったのもこの頃です。アマチュアが作詞作曲した作品を、プロの歌手が歌うNHKの「あなたのメロディー」という番組に応募して受かったこともあります。ただ、東京では自分のやりたいことが思うようにできないと感じて、沖縄に戻りました。25歳の頃です。

原：沖縄で音楽活動をリスタートされたんですね。

照屋：食べていくために、CMソングを作っていました。民謡歌手の曲のアレンジやベース伴奏もやっていましたが、それだけでは収入も少なく、将来も見えない。そこで、バンドを作ろうと決めました。それが、「りんけんバンド」です。ヤマハの「ポップコン」などに出て、沖縄大会で3回優勝しました。関西四国大会に出場したときは銅メダルも取りました。しかし、そこからが全然ダメな成績で、自分に合っていないか

続きは雑誌で

Umano! — Rinken Teruya